沖縄県全域の海兵隊基地で実施された演習で災害対応を試す

海兵隊基地で行われた医療避難訓練で負傷者役の海兵隊員を担ぎ避難を急ぐ正路秀樹陸曹長

【在沖米海兵隊施設キャンプ・フォスター】10 月 21 日から 25 日の日程で沖縄にある全ての米海兵隊施設で演習コンスタント・ビジランス（不断の警戒）が実施されました。

演習には陸上自衛隊、米軍、防衛総省扶養家族学校などの関係者が多数参加し、沖縄にある海兵隊基地の緊急対応能力や即応体制を整える手順を試しました。

これらの手順を試して指導するためのシナリオが作成され、重要な資産に被害をもたらす津波に対応し、復興を支援する海兵隊基地の能力の評価と確認が行われました。

海兵隊基地で作戦・訓練・計画部任務保証を担当するティモシー・モレロ担当官は、市民の不安を想定した避難作戦、捜索救助訓練、安全な避難場所（米軍基地内を通過する地元市民の避難訓練など）の全ての訓練は、海兵隊基地の津波上陸への対応や復興機能を確認するためのものだったと説明しています。

災害は沖縄に住んでいる人全員に影響を及ぼすことを認識し、キャンプ・フォスターで実施された大衆への食糧供給やトリアージでは、海兵隊員と陸上自衛隊員が共に訓練を行いました。

訓練担当下士官で、医療大隊衛生兵のダニー・ブラウン一等兵曹は、「誰もが基本的な応急処置や緊急救援方法を知るべきです。近い将来起こり得る可能性がある災害のため、このような演習で米軍と自衛隊が最も効率的に対応するために体制を整えることができます」と話しています。

米軍と自衛隊が情報を共有することで、協力して危機的状況に対応して命を救い、復興作戦で不可欠なサポートを行うことができます。

第 15 後方支援衛生隊長の小崎浩範三等陸佐は、「医療機能を共有、比較することでお互いから学ぶことが沢山あります。今日、共に協力し合ったことで、今後、必要な人たちにより良いケアを施すことができます」と述べています。

軍人の即応性を試すのと同様にこの演習のもう一つのゴールは、海兵隊基地全ての関係者に避難訓練と応急処置の手順に慣れてもらうことです。

演習担当次長のジェームズ・ハウレイ氏は、「この演習の目的は、二カ国間の軍隊のみならず、二カ国間で行っている機能を誰とでも連携できるように取り入れることです。起こり得る災害に備えるという全体像では、我々全員が不可欠な役割を担っているのです」と説明しています。

今年の演習では、陸上自衛隊と共に連携して壊滅的な自然災害に対応し、復旧作業を行い、基地関係者に沖縄の重要な避難経路の情報を提供することで、海兵隊基地を災害にしっかりと備えることができました。

ハウレイ担当次長は、「演習を通して見受けることができたコミュニケーションや融合は、まさしく素晴らしいものでした。ケアの調整や二カ国間の機能訓練、最終的には災害に応じる準備を整えることができました」と締めくくりました。